

じゃんぼぶれす

お買い物は
お近くの
土日
ジャンボ市
グループで
どうぞ

未だ判らない厨川柵のロマン

現在の厨川の柵の後からは、何も出てこなかったんだよ・・・
という叔母の話が頭に残っていたところ・・・に大釜から・・・

厨川柵(くりやがわのさく)は、のある天昌寺台地が中核部として、岩手県盛岡市の西にあったと言われている。俘囚との言われる豪族安倍氏が築いた勢力範囲最北の古代城柵である。衣川柵などと並び、安倍氏の重要拠点であった。「厨川」は、中世から近世には栗谷川、栗屋河とも記された。河川の合流点付近にあり、約10mの断崖絶壁の自然要塞にあったとも伝えられる。所在地は広範囲にわたるとも見られ、明確ではない。現在の岩鷲山天昌寺(盛岡市天昌寺町)

――沿革――

厨川柵は、平安時代の奥六郡のうち、の岩手郡に存在した安倍氏の柵の一つで、現在の岩手県盛岡市の

土器は確認されていない。盛岡市厨川地区(旧厨川村)に隣接する、岩手郡滝沢村大釜地区では、安倍氏時代の土器を出土する遺跡が2戸柵の究明には、対象範囲を拡げることがありそうである。

厨川柵は安倍頼時の次男安倍貞任が拠点とした。よって安倍貞任は「厨川次郎」を名乗った。前九年合戦(前九年の役)において源頼義らとの最終決戦場となり、安倍氏の勢力はここで滅んだ。その後、宗任、家任、則任は降伏して九州へ流刑に処され、重任は殺された。

この合戦で斬首された藤原経清は安倍頼時の娘婿であり、経清の長子清衡は母とともに清原氏に入り成長し、後三年合戦の後、平泉を開府し奥州藤原氏の祖となる。

安倍氏滅亡後、奥六郡は清原氏の所領となり、さらに安倍氏の血を引く奥州藤原氏の支配下となる。岩手郡は奥州藤原氏の一族「樋爪氏」が所管したと考えられている。

文治5年(1189)源頼朝が奥州藤原氏を討ち、奥州を平定した。頼朝は父祖による安倍氏追討以来の先例にならい、厨川を訪れ、戦功のあった工藤小次郎行光を岩手郡地頭に任じた(『吾妻鏡』)。工藤氏は厨川を拠点に岩手郡を統治し、「岩手殿」と呼ばれた。工藤行光は伊豆の御家人とされているが、甲斐国の工藤氏一族という説もある。

また源頼朝の命に抛り、一帯の精神的支柱である岩手山を神格化した「岩鷲山大権現」の大宮司となり、安倍氏が厨川柵に祀っていた祈願所を継承した。阿弥陀・薬師・観音の祭祀権を掌握し、名実共に当地の支配者となった。この祈禱所が現在の「曹洞宗岩鷲山天昌寺(かつての天台宗岩鷲山天昌寺)」に相当する。天昌寺には、栗谷川家の墳墓が現存する。

未だ判らないこういうロマンが大になっており、台状に形成した底釜の地にかくれているかもしれない。

大釜館遺跡は、大釜地区(旧大釜村)に隣接する、岩手郡滝沢村大釜地区では、安倍氏時代の土器を出土する遺跡が2戸柵の究明には、対象範囲を拡げることがありそうである。

のち、南部氏の進攻及び豊臣政権の城割りにより、厨川城は破却されたが、厨川(栗谷川)氏は南北朝期以後も有力氏族との婚姻を重ね、最終的には南部家の家臣に組み込まれていた。

現在、安倍館遺跡に見られる壕跡は、この「厨川(栗谷川)城」の遺構であり、工藤氏が司った時代のもので考えられている。北上川と雫石川の合流点以北、現在の盛岡駅以北はかつての「厨川村」であり、旧名で上厨川(盛岡市西部)、下厨川(盛岡市北西部)に分かれる。

なお、盛岡城築城のとき御菜園(盛岡市菜園地区)も、かつては厨川であったが、北上川改修により城下に組み入れられた。

厨川の由来「編集」

厨川とは、厨川柵の自然要害となつた「雫石川」の古名の一つであると考えられる。雫石川は、氾濫が多いため近世では「荒川」とも呼ばれた。(雫石の名は、現在の雫石川の上流に当たる「雫石盆地」に由来し、さらに「雫石神社」に由来する。)

大釜館遺跡

大釜館遺跡は、大釜地区(旧大釜村)に隣接する、岩手郡滝沢村大釜地区では、安倍氏時代の土器を出土する遺跡が2戸柵の究明には、対象範囲を拡げることがありそうである。

大釜館遺跡は、大釜地区(旧大釜村)に隣接する、岩手郡滝沢村大釜地区では、安倍氏時代の土器を出土する遺跡が2戸柵の究明には、対象範囲を拡げることがありそうである。

平成5年の調査で検出され、7号大きな遺跡は、北西からの土器群の概要です。

19点の土器群と同類の土器が出土している岩手県内の遺跡は岩手溝の南側に重っており、7号溝の一関市河崎の柵擬定地夜どがあります。また、滝沢村八幡館山遺跡の方角が新しい遺構です。

7号溝跡出土の土器19点は、溝から同類の土器片を採取している南東部分10mの間に列点状にありますが、今のところ県内でも出土並んで、溝の底に近い埋土中から例が比較的小さいです。

出土したもので、意図的に置かれた、県内におけるこれら遺跡の中たか、もしくは一括廃棄されたもので、金ヶ崎町西根遺跡と鳥海A遺跡は、古代末期の11世紀中半に

これらの土器は、考古学では土師あつた前九年合戦(1051N、器(はじき)と呼ばれ、酸化焰焼成1062)の経緯を記述した『陸奥と言われる焼き方で、空気中の酸話記』によれば、当時、北上川中素を十分送り込んで燃料を燃やす流域の奥六郡に勢力をもっていた焰をあげて焼きあげる最も初期か安倍氏一族の長、頼時の子息の宗らの方法で焼かれたものです。主任が構えていた安倍氏の主柵の一端、全ての土器は、ロクロを用いつ、鳥海柵(とのみのさく)であった形成し回転系切り痕が底に認められたことが確認されています。

つまり、大釜館遺跡7号溝跡出土の19点中の1点は、土器の内外土の黒色処理高台付境1点、素焼を黒色処理とヘラミガキ調整をし、き婉17点、小皿1点、合わせて低い高台が付けた塊です。口19点の土師器は、古代末期の径15cm、底径7.7cm、器高11世紀後半の土器で、安倍氏の6.5cmの大きさです。

17点は、橙系の色あいをした景の中で、今後の歴史解明に資する素焼きのままの境です。器の内面は、なめらかに調整した仕上がり

陸奥話記

1 7 官軍、厨川の柵を囲む

原文	読み下し	現代語訳
同十四日向厨川柵。	同十四日、(官軍は) 厨川柵に向う。	9 月 1 4 日、官軍は厨川柵に向った。
十五日酉尅到着。	十五日、酉（とり）の尅（こく）に到着す。	1 5 日、午後 6 時頃（酉）に到着した
圍厨川姫戸二柵。	厨川、姫戸（うばと）の二柵を圍（囲）む。	厨川、姫戸（うばと）の二柵を包囲した。
相去七十八町許也。	相去ること七十八町許（ばか）りなり。	ふたつの柵の距離は、7、8 町（6 5 0－7 6 0 m）ほどである。
結陣張翼終夜守之。	陣を結びて、翼を張り、終夜これを守る。。	このふたつの柵を封鎖するため鶴翼の陣を張って、終夜これを守備した。
件柵西北大澤二面阻河。	件（くだん）の柵、西北は大澤を、二面は河を阻（へだ）てる。	ふたつの柵の西北には大きな沢があり、柵の二面は河によって隔てられている。
々岸三丈有餘壁立無途。	河岸は、三丈有余（餘）の壁が立ちて途なし。	その河岸には、三丈（9 m）以上の壁が構築されていて遮断されている。
其内築柵自固。	その内に柵を築きて、自ら固（かた）む。	貞任軍はその中に柵を築き、防御の構えを取っている。
柵上構樓櫓鋭卒居之。	柵の上に樓櫓（ろうろ＝物見やぐら）を構え、ここに鋭卒を居く。	柵の上には物見櫓（やぐら）を構えて、精兵が敵兵の動向を見張っている。
河興柵間亦堀隍。々底倒立刀地上蒔截刀。	河と柵の間に、また隍（みぞ）を堀り、隍の底に倒（さかさま）に刀（やいば）を地上に立て、截刀を蒔く。	河と柵の間には、敵兵を防ぐための溝を堀り、その溝の底には、無数の刀を逆さまに立て、その下にはまきびしが蒔かれている。
遠者発弩射之近者投石打之。	遠き者は、弩（ど＝いしゆみ）を発し、これを射て、近き者は、石を投てこれを打つ。	遠い敵には、弩（ど＝いしゆみ）を放ってこれを射殺し、接近した敵には、礮（つぶて）を投てこれを倒す。
適（敵マ）到柵下者建沸湯沃之振利刀殺之。	敵が柵の下に到れば、沸湯（ふっとう）を建てて、これを沃（そそ）ぎ、利刀（りじん）を振いて、これを殺す。	敵が柵の下に到達したとすれば、上から熱湯を沸かして注ぎ、弱ったところを鋭利な刀を振って斬り殺すのである。
官軍到着時楼上兵招官軍曰。戦来焉。	官軍が到着せむ時、楼上兵は、官軍を招きて曰く、「いざ戦ひ来れ」と。	そのような堅固な柵に官軍が到着した時、城内にいる兵は、官軍を招き入れるように言った。「さあ、いつでもかかって来い」と、
雑女数十人登楼唱歌。	雑女（ぞうめ）数十人は、楼に登りれ歌を唱（うた）ひぬ	雑仕女（ぞうしめ）たちが数十人、高台に登り、歌を唱（うた）って、官軍を挑発した。
將軍惡之自十六日卯時攻戦。	將軍はこれを惡（にく）みて、自ら十六日、卯（う）の時に攻め戦ふ。	將軍はこれに腹を立てて、自ら 1 6 日、早朝 6 時頃、柵を攻撃した。
終日通夜積弩乱発矢石如雨。	終日通夜、積弩（せきど＝連射の弩）を乱発して、矢石（しせき）は雨の如し。	それから官軍は、昼、夜を問わず、連射式の弩を乱発し、矢と礮を雨あられと降らせたが、
城中固守不被拔之。	城中は固く守りて、これを抜かれず。	城中はビクともせず落城させることはできなかった。
官軍死者数百人。	官軍の死者は数百人なり。	逆に官軍の死者数は数百名に及んだ。